幕末の悲劇 水戸天狗党事件（前編）

～小藩、大野藩の窮余の一策～

由利公正が挙藩上洛計画の責めを受け、藩から幽閉蟄居の処分を受けていた元治元（1864）年、福井では全国を揺るがした大事件がクライマックスを迎えます。いわゆる水戸天狗党事件です。

幕末の水戸藩では、藩の実権を巡り保守派と尊王攘夷を強硬に主張し藩政をリードしようとする改革派（天狗党）に分かれ、激しく対立していました。

松平春嶽は、明治になって記した回顧録「逸事史補」の中で、「この両党（派）の争いの起源は、実は水戸斉昭卿の大失策である。大不徳である。」として、対立の責任は水戸藩主であった徳川斉昭にあったと記しています。改革派を重用し、ことさら保守派を退けたため、保守派が天狗党に対する憎悪を深めたというものです。

両派の対立が深刻化する中、元治元年3月、天狗党の首領格、藤田小四郎（尊王攘夷思想に影響を与えた水戸藩士藤田東湖の子）が、保守派の一掃と横浜港鎖港を実現しようと筑波山で挙兵しました。

この時は鎮圧されましたが、天狗党一行は、同年11月1日、改革派の重臣、武田耕雲斎を将に立てて再び挙兵。斉昭の七男であり、当時、横浜港鎖港を主張していた禁裏御守衛総督、一橋慶喜を頼って西上を開始します。幕府は一行を「浮浪之徒」とし、諸藩に追討令を発したため、先々で行く手を阻まれましたが、行路を変更しながら西上を続けます。その途中、美濃国で進路を北に変え、12月4日、蝿帽子峠を越えて越前国に入ったのです。

領内に天狗党を迎えた大野藩は、軍事惣督内山隆佐を亡くしたばかりの時期で、藩主、土井利恒も江戸在役中であったため、重臣が合議、対応を図ります。天狗党が速やかに領内を通過するよう、大野藩は、一行が通行する道筋に当たる5村200軒を超える民家を焼き払うという焼土作戦を取ります。（一部の村の焼打ちは手違いで天狗党の通過後に行われ、村人の怒りを買いました。）当時、福井の諸藩は、幕府の命で第一次長州征伐や京都の警護に多数の兵を出しており、大野藩が割ける戦力はわずか200人程度しかありませんでした。焼打ちは、戦わずして千人近い天狗党を領内から追い払おうとする小藩、大野藩が取った窮余の一策でしたが、この策で多くの民衆が家を失ったのです。

（後編に続く）

「水戸天狗党の西上行程」（『図説 福井県史』より）

関連史料・ゆかりの地

越前大野城

織田信長の部隊将金森長近が築城した越前大野城は、天正４（1576）年から４年の歳月を要して完成しました。その後、大野藩主、土井氏の居城となります。現在の城は、昭和43（1968）年に再建されたもので、近年は雲海に浮かぶ“天空の城”としても人気を集めています。

【住所】大野市城町３－109（JR越前大野駅より天守閣まで徒歩約40分）

参考資料等
現代語訳『逸事史補』福井県観光営業部ブランド営業課
『図説 福井県史』福井県

発行／福井県観光営業部ブランド営業課